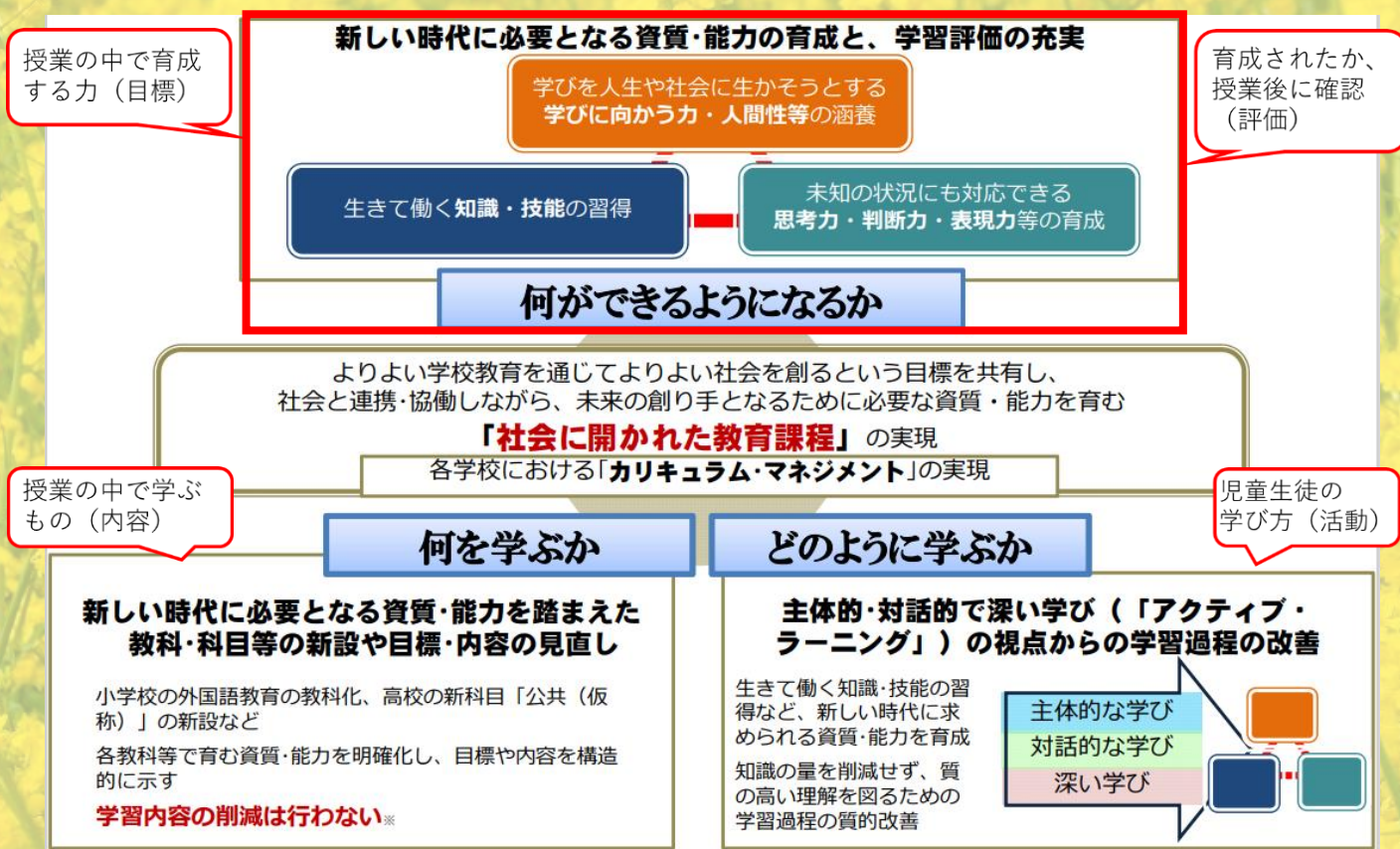


乙訓の学び vol. 3

～単元を通して何ができるようになるか～

資質・能力の育成を図るとき、下図のように「何ができるようになるか」を意識した授業づくりが重要です。「目標」「指導」「評価」を一体的に捉え、単元の出口で児童生徒が「何ができるようになったか」を実感できるように単元全体を見通した授業をデザインします。どうすればよりよい授業がデザインできるのか、このリーフレットを通して一緒に考えていきましょう。



授業をデザインするときには、単元全体を捉えて「どのような力を付ける（育成する）のか」を確認しながら学習活動を計画することが重要です。その際、児童生徒自身が学びの地図を持ち、何を学ぶためにその活動をするのかを理解しながら授業を進めていくことが大切です。このリーフレットでは、「何ができるようになるか」という視点を取り入れた授業づくりについて示しています。



今、求められている「学力」とは

令和5年度実施の「全国学力・学習状況調査」の結果から、各教科で以下の点に課題があることが分かりました。また、「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果からは、主体的・対話的で深い学びに関する質問項目において、学力値や非認知能力との相関が見られました。



国語

- ・書き表し方を工夫すること
- ・自分の考えをまとめること
- ・読み手の立場に立って考えること
- ・根拠を明確にして書いたり考えたりすること

算数・数学

- ・基礎的な内容について理解すること
- ・数学的な表現を用いて説明したり記述したりすること
- ・証明すること

英語

- ・目的・場面・状況から判断して読み取ったり聞きとったり書いたりすること
- ・知識を正確に活用して聞いたり書いたりすること

主体的・対話的で深い学びに関する質問項目

知識を関連付ける

自分自身で調べる

学びのパスポート
児童生徒質問調査より

自分の考えをもとに課題に取り組む

工夫して発表する

自分の考えを伝える・友達の考えを聞く

学習内容を振り返る



授業の中で主体的・対話的で深い学びを実現していくためには、単元計画を作る際に左のような場面を設定するとよいですね。

「何ができるようになるか」をイメージして評価規準をつくりましょう。

作成の手順

- ① ねらいを明確にする。
- ② 学習内容と指導事項を確かめ、学習活動を設定する。
- ③ どのような行動・行為を見取って評価するかを考える。
- ④ 評価の実際と手立てを想定する。

目標

指導

評価

評価規準を作るときには学習指導要領を確認し、ねらいや指導事項を児童生徒の姿で言語化することが大切です。



◎単元で付けたい力（資質・能力）を発揮した姿がイメージできているか？

【例】「〇〇について表現している。」 ⇒ 「〇〇について単元で付けたい力を活用して、表現している。」
資質・能力

単元計画との関連を図る。

この課題を解決するには〇〇に着目するといね。



こういう考え方を使うと、解決できそうだよ。

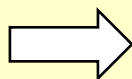
見方・考え方を働かせた学習活動を通して、資質・能力を身に付けていっているな。



時	ねらい・学習活動	評価
1	◎資質・能力を身に付ける必然性のある学習活動と学習課題の設定が重要	◎記録に残す評価では、全員の評価ができる方法・場面の設定が重要
2	■指導事項を確認し、ねらいとなる資質・能力を明らかにする。	■形成的評価をしながら単元を進める。
3	■各教科の見方・考え方を働かせることができる学習活動を設定する。 (国語なら言語活動、社会なら課題を追究したり解決したりする活動など)	■児童生徒が資質・能力を発揮できる場面で記録に残す評価を行う。(「おおむね満足できる」状況や「努力を要する状況」への手立てを明らかにしておく)
4	■ねらいとする資質・能力を身に付ける場面を設定する。	
5	■資質・能力を発揮する場面を設定し、評価する。	

目標 - 指導 - 評価の一体化

「内容」について、「活動」を通して学ぶことで、「目標」となる力を育成し、「評価」する。



学びの、その先へ

何ができるようになるか

授業者は活動そのもののゴールではなく、何ができるようになるか良いかを児童生徒の姿で考えましょう。



「何ができるようになるか」を意識した授業デザイン例

外国語科 授業デザイン例（中学校第1学年） 「話すこと〔やり取り〕」

「思考力・判断力・表現力等」にポイントを絞って授業デザイン例を示しています。

【外国語科における思考力・判断力・表現力等の育成に関わる目標】

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

【外国語科における見方・考え方】

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること。

【既習事項・経験知】

- ◆be 動詞の現在形 ◆現在進行形～ing ◆一般動詞の過去形 ◆いろいろな疑問詞
- ◆円滑なコミュニケーションを意識して、あいづちを打ったり、質問したりすること
- ◆相手意識をもち、目的や場面・状況に応じてコミュニケーションを図ろうとすること

小学校でも中学校でも、外国語科における見方・考え方を働かせる言語活動を行うには、コミュニケーションを行う目的や場面、状況の設定が不可欠です。

【単元のゴール】 関心のあることや聞いたことについて、事実や自分の考え、気持ちなどを伝え合う

【単元の目標】		【目標を達成するために付けたい資質・能力】	
思・判・表	○歴史上の人物を紹介したり、相手の人物紹介を聞いて質問したりするために、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝え合うことができる。	◆文脈に応じて、過去形を適切に用いることができる。 ◆関心のある事柄について、目的や場面・状況に合わせて話す内容を適切に選択できる。 ◆自分の考えや感想を表したり、相手に質問したりするときに適切な表現を選択することができる。	
時	学習活動		評価規準・評価方法など
1	○ALT のモデル映像を見て、単元のゴールイメージを確認する。 LEVEL 1	【習得の場面】 be 動詞の過去形の特徴やきまりを理解させる。	
2	○話型シートに沿ってロールプレイを行い、関心のある事柄について、考えや感想などを伝え合う表現に慣れる。	【活用の場面】 be 動詞の過去形を用いて言語活動をさせる。	
3	○be 動詞の過去形や過去進行形の特徴やきまりを学ぶ。 LEVEL 2	【探究の場面】 習得と活用を繰り返しながら、より良く、より適切に表現するために試行錯誤をさせる。	
4	○話型シートを参照しながら、関心のある事柄について、考えや感想などを伝え合う。	【見方・考え方を働かせる場面設定】 対話が継続・発展するような質問や、答え方について考えさせ、やりとりする相手を意識するよう指導する。	
5	○教科書やモデル文、他の人の発話などから、参考にしたい追加表現を書きだす。	【学習者が軌道修正を行える場面設定】 生徒自身が自分の表現内容について見直したり追加したりできる機会を確保する。	この単元で獲得した言語材料も使って、この場面で適切に表現できるかな。
6	○表現を追加したり整理したりするために同じ話題について、複数回伝え合う。 LEVEL 3	【学習者が軌道修正を行える場面設定】 試行錯誤ができるように、十分なアウトプット及び他者参照を行う機会を設定する。	
7	○話型シートを使わずに、関心のある事柄について、考えや感想などを伝え合う。	【学習課題の場面設定】 be 動詞の過去形（学習内容）について生徒が文脈を判断して適切に使えるかを見取る。 ↓ 過去の人物を紹介	
8	○ペアを変えながら、話題について、即興で質問したり、即興で答えたりする。		学習課題 自分の好きな歴史上の人物に対して、相手に興味を持ってもらったり、相手に紹介した人物についてより詳しく知ったりするために、事実や自分の考え、気持ちなどを簡単な語句や文を用いて即興で伝え合う。

【学びの、その先へ】

- ・（第2学年）相手に同意・反対したり、提案したりするやり取りに活かせる
- ・もっといろいろな人と、外国語を使ってより良くコミュニケーションをしたい 等

※NEW CROWN English Series 1
（株式会社 三省堂）を基に作成

イメージしたゴールに至る道筋でどのような資質・能力を身に付ける必要があるかを具体的に考えることが大切です。そうすることで、1時間ごとの授業で何をやる必要があるかが明確になります。

単元全体を見通して、どんな資質・能力を身に付け、どこで発揮させるのかを考えながら計画を立てていきましょう。

「何ができるようになるか」を意識した授業デザインの実践



リーフレットの内容を参考に「何ができるようになるか」を意識した授業デザインを具体化させましょう。単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、「知識・技能を習得する場面」、「思考する場面」、「対話する場面」、「学習を見通して振り返る場面」など、授業者が意図をもって設定し、学んだことを発揮できる場面を作ることが大切です。

単元を1つ選んで、以下の手順で授業デザインをしてみましょう！

ステップ1：単元の全体像を捉える

- ① 目標設定：身に付けさせたい資質・能力（単元のゴール）を明確にする。 知識を関連付ける
- ② 実態の把握：目標に関連して、既習事項は何か、生活体験から得ていることは何かを確認する。
(診断的評価)
- ③ 評価規準：身に付いた資質・能力をどのように評価するか規準・方法を設定する。
- ④ 課題設定：単元の途中で学ぶ必然性がある学習課題を決定する。
- ⑤ 単元の導入：単元のはじめに学習者とゴールを共有し、見通しをもたせる導入を工夫する。

ステップ2：単元の全体像とつなげて授業を構想する

- ⑥ 単元全体を見通した授業デザイン
 - 単元のどこでどのような資質・能力を身に付けさせるか確認し、ゴールに向かう学習活動を設定する。
 - ⇒学習者が知識及び技能を習得する学習活動 自分自身で調べる
 - ⇒学習者が習得した知識及び技能を活用し、思考する学習活動 自分の考えをもとに課題に取り組む
 - ⇒学習者が深い理解を伴う知識及び技能を活用し、思考力・判断力・表現力等を高める学習活動 自分の考えを伝える・友達のことを聞く 工夫して発表する
 - ゴールに向かう途中で必要に応じて軌道修正するための「指導に生かす評価」を行う。(形成的評価)
 - 身に付けさせたい資質・能力に関連付けて「具体的な振り返り」の場を設定する。 学習内容を振り返る
 - ※学習活動の仕方や学び方の振り返り、身に付いた力の振り返り等
 - 単元の終わりで達成状況を見取り、「記録に残す評価」を行う。(総括的評価)
 - ※「ねらい」を達成できているか、「自分でできる力」を身に付けているか等



主体的・対話的で深い学びを意識して・・・



できるようになったかな？



学習者が主体となって学ぶためには、学習者自身が「学びの全体像」を見渡せていることが必要だということですね。その上で、「どのような視点で物事を捉え（見方）、どのように思考していくのか（考え方）」という学習者の学びの姿（学習活動）を教科ごとに具体的に描いて、創意工夫を重ねる授業デザインをすることが大切です。教科によって異なる見方・考え方に注意しながら、児童生徒の確かな学力を育成していくことで充実した学びを実現していきましょう。

☆参考資料

京都府教育委員会
学校改善支援プラン

国立教育政策研究所
全国学力・学習状況調査
授業アイデア例

国立教育政策研究所
「指導と評価の一体化」のための
学習評価に関する参考資料

